

グローバル社会を生きる子どもたちへの英語教育で大切なこと

ベネッセ教育総合研究所
「中高生の英語学習に関する実態調査」の結果から

文部科学省が2013年12月に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、小学校英語の拡充強化、中学校における授業の英語での実施など、「小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実」し、児童・生徒の英語力の向上が目指されている。未来を生きる子どもたちにとって、今後のよりよい英語教育のあり方を探るため、現在の中学生の英語学習の実態や意識について、ベネッセ教育総合研究所が実施した調査結果を基に検証する。

出典◎ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査」（2014年3月実施。全国の中学1年生～高校3年生6,294人が対象）。

調査結果はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

英語を好きにすることが将来、英語を積極的に使うイメージにつながる

文部科学省は英語教育の改革を検討していますが、生徒たちも9割以上が将来、何らかの形で英語が必要になると感じています。しかし、自

分が英語を使うイメージを持つ生徒は、半数強にとどまりました（図1）。人によって度合いが違うとはいえ、中学校段階で「英語を使うことはほとんどない」と4割以上も思っていることは、グローバル社会が進んでいく中では大きな課題といえます。



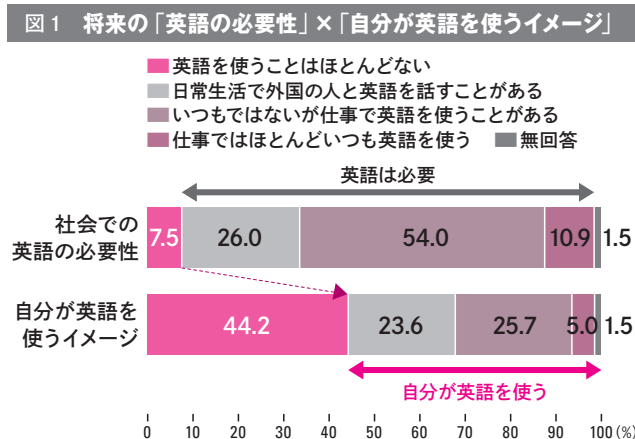
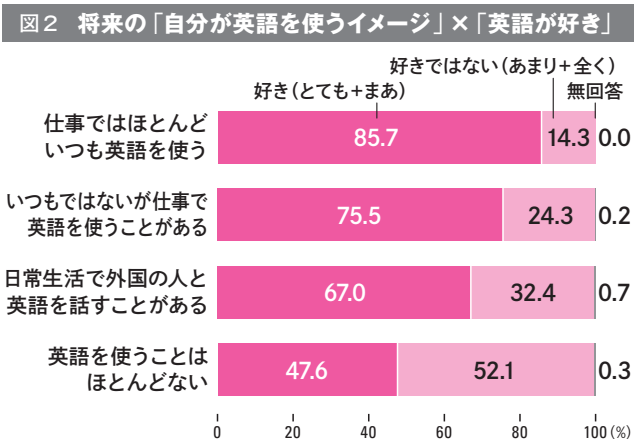
ベネッセ教育総合研究所
 グローバル教育研究室
 研究員
福本優美子
 ふくもと・ゆみこ

◎英語教育領域の研究を量的研究と質的研究の両側面から行う。「第1回中学校英語に関する基本調査」「第1回小学校英語に関する基本調査」などを担当。

一方で、将来の自分について、より高度に英語を使うイメージを持つ生徒ほど、英語を「好き」な割合が高いことが分かりました（図2）。英語を好きなことが、将来、英語を積極的に使うイメージにつながりやすいといえそうです。

そこで、英語に関する意識を見ると、英語を「好き」な生徒ほど、「文のつくりやくみが面白い」「音やリズムが面白い」と感じています（図3）。将来、英語を「使う」イメージと同様に、あるいはそれ以前に、英語の学びそのものに楽しさを感じさせることが、英語を「好き」にさせ、更に英語を「使う」イメージが湧く上で重要になるようです。

中学校の英語教育改革では、「授業は英語で」という新たな取り組みが求められています。しかし、英語教育のあり方を大きく変えることばか



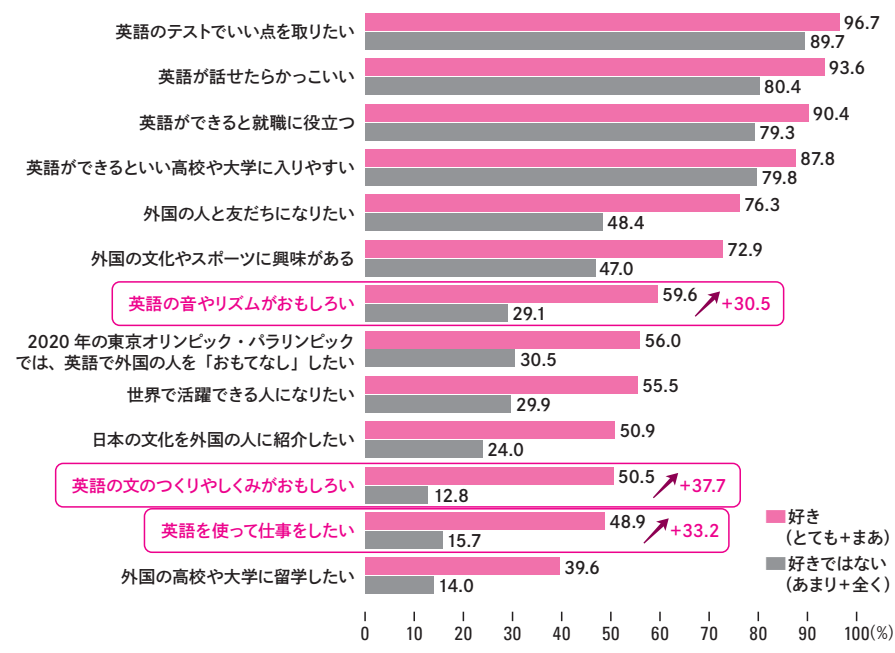
りではなく、文のしくみを楽しく理解できるよう工夫したり、音読で英語の音の面白さを感じさせたりなど、今の指導をより面白くすることで、生徒の「好き」を高めていくことが大切ではないでしょうか。

**「書く・話す」機会を増やし
英語を使う活動につなげる**

ただ、日本の中学生を取り巻く環境には、実際に英語を使う場面がまだ少ないのが現実です。授業や予習・復習は、生徒が英語に触れる貴重な機会となっています。ところが、授業内容を見ると、「和訳・暗記・解説・問題演習」などは学年に関係なく行われているものの、「自分の気持ちや考えを英語で書く・話す」などの英語を「使う」活動は少ない上に、中学2年生をピークに、学年が上がるにつれて減少しています(図4)。

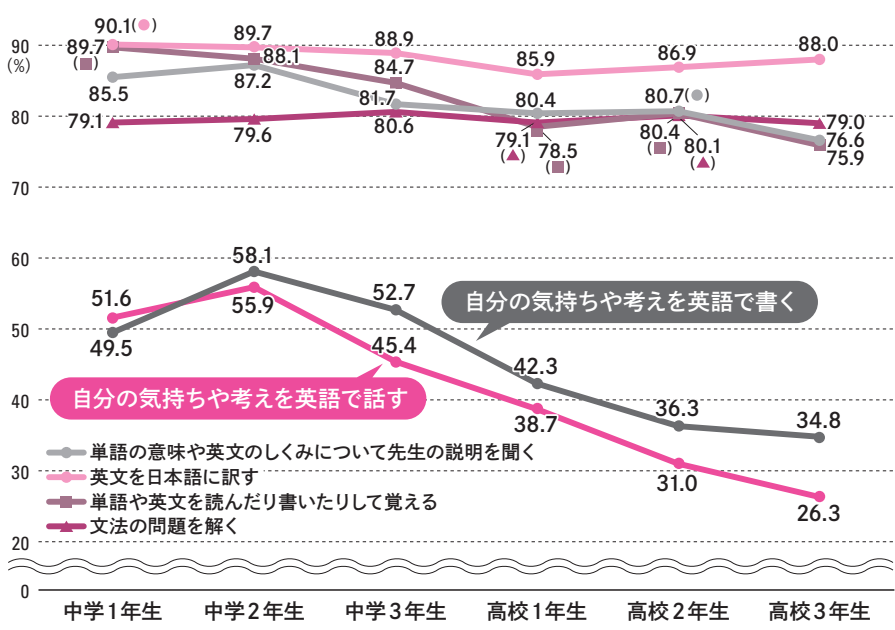
- ・ 単語の意味を調べる(55.5%)
- ・ 教科書本文をノートに写す(47%)
- ・ 教科書本文を和訳する(34.3%)
- ・ 復習で多い学習法はこの3つです。
- ・ 問題を解く(66.5%)
- ・ 単語練習(65.4%)

図3 「英語に関する意識」×「英語が好き」



注 赤字で囲んだ項目は、「好き」と「好きではない」とで30ポイント以上差のあった意識

図4 授業でしている学習



注 「よくしている」+「ときどきしている」の%

・ 教科書本文やキーセンテンスを覚える(39.9%)
「英語で意見や感想を書く」は、予習・復習を合わせても18.2%しか行われていませんでした。
授業でも、予習・復習でも、「書く」「話す」など、英語を「使う」機会を増やすことが重要です。「使う」こと

が少なければ、「英語を使うとはどういうことか」という感覚を持ちにくく、将来使うイメージが湧かないのも当然です。生徒が中学校で英語を使う機会を増やし、その必要性を伝えると共に、「具体的にどう使うのか」「何に使うのか」「使えたらどうなるのか」についてもイメージさせる機

会を与える必要があると考えます。本調査では、英語の好き嫌いや得意不得意に関係なく、多くの生徒が「英語が話せたらカッコいい」と感じていることも分かりました。生徒が持つこの意識にも期待し、今後の英語教育改革、そしてグローバル化に取り組んでいけたらと思います。